

中学校における Graded Readers を使用しての多読指導の効果の研究

A Study on the Effectiveness of Extensive Reading Instruction

Using Graded Readers at a Junior High School

畠山 廣子

0. 序文

語学教師としての最終目標は「生涯にわたって自ら学び続ける力」の育成にあると信じる。Benson(2001)によれば、自発的な学習とは、スキル獲得よりはむしろ学習者自身の内面から発する興味・関心が根底にあるべきであると主張している。個々の学習者はそれぞれの関心と個性を持つ。もしも彼らが自らの英語力に適した本を自由に選択できる環境にあれば、自らの興味・関心にそって読書できるようになるであろう。多読は語学学習者の自発的な学習意欲の育成に最も効果を発揮するであろう。Day & Bamford (1998) は次の7点を多読の効果として主張している。

- (1) 学習者中心の、学習者自身の自己管理による学習活動
- (2) 第二言語に対する肯定的学習態度の育成
- (3) 様々な学習環境や、様々な学習者の個性に柔軟に対応が可能
- (4) 学習意欲の高揚
- (5) 英文読解への自信獲得
- (6) 学習者の自尊心の高揚
- (7) 英文読解ストラテジーの活性化

2003年の文部科学省の学習指導要領の求める目標として「概要把握や著者の意図を理解すること」が掲げられているが、現実の授業では decode 中心の読解指導が多い。Nuttall (2000) によれば、外国語の知識発達には、第一にその国に行って実際に生活することが最も効果的であり、第二には「多読」が効果的であるとしている。読む速度、楽しさ、理解度は同心円上にあり、関連性を伴いながら発達していく。しかし日本で使用される検定教科書は grammar-centered course book であり、1ページあたりの未知語が多く、新文法も必ず含まれ、多読には適しない教材である。ここに文部科学省の目標と現実との矛盾が生じる。

Little (1997) は言語の知識理解には明示的指導と非明示的指導が欠かせないとしている。教室で教えられる指導法は、同一の教材を使いながら、主として明示的指導に偏りがちである。そこで、graded readers の活用による、学習材料の自己決定は、自発的な学習意欲を燃え立たせ、生涯にわたって、永続的な学習意欲を育むであろうと考えた。

多読の効果の検証には長期的な経過を必要とするために、先行研究の多くは、私立の大学大学付属中高でなされた。私の研究は公立中学校における4週間の多読の試みである。日本には公立の中学校での先行研究はほとんどないので、この実験がこの分野で一石を投じることができれば幸いであると願っている。

第1章 はじめに

天満 (1982)は「英語ということばの学習には、子どもの感受性に訴える何かが必要なければならない。こどもの感性を知識獲得の犠牲にしてはならない」と警告している。また Krashen (1993) は文法指導よりも、自由読書こそが、ことばの教育の根幹であり、最も有効であると主張している。

日本の中学校における英語教育研究会では、単位時間あたりの指導の流れにおける学習効果に議論が焦点化される傾向が強い。文部科学省のスローガンである「実践的 communication 能力の育成」の一方では使用可能な語彙の量が年々減少している矛盾がある。さらに、英語という教科が入試の合否判定基準に大きな位置を示している現状が、英語不得意生徒の自尊心低下にも拍車をかけている。単位時間における英語の効果的な指導技術向上も従来どおり目を向けながら、同時に学習者の肯定的な自己評価と自発的な学習意欲の保持が言語教育の最重要課題にされなければならない。

この調査を決心した直接の動機は、現職教員の大学院研修生として、アンハー教授の「リーディング」を受講し、多読が学習者の自発的な学習意欲を高め、自信をつけさせていくのを自らが体験したことによる。語彙のレベルを易しくすることで、中学生の課外活動としての多読指導を試みてみたいと思った。

Research Questions は次の4点である。

- (1) 多読によって読解力が向上したか。
- (2) 多読によってどのような読解ストラテジーを使い、どの読解ストラテジーが多読には有効であったか。
- (3) 4つの変数 (Word-Per-Minute, 英語力、総語数、読解ストラテジーの平均) にどのような相関関係が見られたか。
- (4) 多読に対する学習者の態度にどのような変化があったか。

調査の結果、事後テストにおいて、多読した生徒の68%は読解力が向上、26%向上しなかった。多読によって辞書の使用をせずに読み進めていくストラテジーを頻繁に使用することがわかった。4つの変数では、最も高い相関関係を示したのが、WPM と英語力であった。多読を楽しみながら、読解ストラテジーを使い分けるよ

うになる最低総語数は1万語らしいこともわかった。総語数が多くなるにつれて、生徒は自信をもって多読を進めていくこと、自己の英語力内の本を選択できた生徒は、流暢な読解に快感を覚えるようになり、自己肯定感を抱くこともわかった。

正規の授業での多読指導を可能にするためには、月1度の自由読書時間を設定し、多読教材として幼児用絵本の読み聞かせや、他社の教科書の利用などが考えられる。自己決定による自由読書は、自発的学習意欲を刺激し、長期的には学習者の自信と満足を喚起し、卒業後も読書を楽しみながら、学習意欲を保持していくことが期待される。

第2章 文献考察

2.1. Reading Hypothesis

Krashen はインプット理論を背景に、過去100年間の230以上の研究論文から、自由読書は読解力、書く力、語彙、綴り、文法において効果があることを証明した。

2.2. Extensive Reading Bookstrap Hypothesis

Day & Bamford は多読による2点の効果をあげている。ひとつは sight vocabulary の拡大および目標言語の世界知識の拡張という言語的な側面を挙げた。もうひとつは情意的効果である。すなわち多読によって、英語読書が可能であることの気づきと喜びが、学習者の第2言語に対する肯定的な学習態度を刺激し、その後の多読読書体験に feedback されながら、結果的に読解力の向上、学習意欲と読書による楽しみの高揚につながっていくとした。

2.3. Graded Readers

Rob Waring (2000) は graded readers を使用しての多読の効果について次の5点をあげている。第1に読み手が自己の英語力内の本を選択すれば、読みの速度が上昇し、自動的に認識していく力がつく。第2に多読によって自信がつき、さらに読み進める意欲の喚起になる。第3に読書習慣が形成され、教室外、教師不在でも語学力向上に寄与する。第4にさまざまな文章様式への応用力が向上する。第5に必然的な場面設定における語彙、文法構造に何度も遭遇することによって、自然に語学知識を身につけるようになる。

2.4. 国内での先行研究事例

(1) 山内 (1985)

中学3年生対象に20回にわたる速読指導の効果を検証した。その結論は次の通り。

- 1)速読の向上には英語力よりも、むしろ学習者の learning style が影響する。
- 2)WPM は50から100の間に始まり、指導によって100から200まで向上する。
- 3)英語力の低い生徒の速読の進歩は、英語力の中、高の生徒に比べて遅い。ま

た教材の種類によって影響を受けやすい。

4)読解ストラテジーの変化は、未知語の推測にもっとも顕著に現れる。

(2) 金谷ほか (1992)

金谷憲を中心とする山梨英和中高での 1989 年からの多読に関する研究。葉袋は中学生に対して 3-4 週間のリーディングマラソンを実施し、読解力が向上したと報告している。多読による成果は 8 ヶ月後に顕著に現れ、不参加者との差はどんどん広がっていくことも検証した。また読解ストラテジーの中で最も頻繁に使われるのは辞書を引かずに読む進めるストラテジーであるとしている。

(3) 中沢 (2004)

彼は塾で、中 3 年生は 2 時間半の多読を、また小学 6 年生、中学 1 年生には Oxford Reading Tree の読み聞かせを行った。彼らは、毎回 1000 語は読むことができ、中学 1 年生の教科書を即座に流暢に読解できるようになったという。数字的なデータを示していないが、彼の推測では、20%が多読に強い関心を示し成功していく、20%はほとんど関心を示さずに終わる。残り 60%は言われるままに続けるという。この 60%をどう多読に引き付けていくかが重要であるとしている。

(4) 橋本ほか (2000)

彼らは対象者を WPM80 以上と未満で分類し、読み進めるにつれて、WPM、読解力、英語力の向上が見られた。150 ページを越えると、上位者は多読を楽しみながら行うようになり、下位者でも難儀することなく読み進めることができるようになった。さらに、辞書に依存しなくなり、直読直解するようになったという。結果的に多読をする以前よりも、英語が好きになる傾向が見られたと報告している。

(5) Mason & Krashen (1997)

外国語の単位を落とした大学生対象に多読指導を行った結果、テストで大幅の上昇が見られただけでなく、伝統的な精読クラスとほぼ同じ得点を獲得した。さらに、怠けちな学習態度改善されて、熱心な英語読者になった。次の研究では多読による外国語習得法は伝統的な習得法に比べて、読解力だけでなく、英作文においても優れた成果を示すことが実証した。

第 3 章 Research Questions

(1)多読によって読解力が向上したか。

(2)多読によってどのような読解ストラテジーを使い、どの読解ストラテジーが有効であったか。

(3)4 つの変数 (WPM, 英語力、総語数、読解ストラテジーの平均) にどのような相関関係が見られたか。

(4)多読に対する学習者の態度に、どのような変容が見られたか。

第4章 方法

4.1. 対象者

2004年2月、岩手県紫波郡のある公立中学校の課外活動として、3年生7クラスからの希望者29名に、放課後45分から50分程度で、全部で6回の多読講座を実施した。

4.2. 手順

4.2.1. 6回の講座の流れ

最初の講座で精読と多読に相違について説明。ルールは次の3点とした。

- (1) 自分で読みたい本を自由に選ぶ。気に入らない時は、別な本に変える。
- (2) 未知語があっても、前後関係から推測したり、読み飛ばしたりして大意をつかむ。
- (3) なるべく辞書を使わない。

事前テストの内容は、英語検定3、4級の読解問題と *Very Easy True Stories* からの抜粋 (30点満点)。また事前アンケートも実施。2回目は *Basic Reading Power* でスキル指導。説明に時間がかかり、肝心の多読時間が10分以内となってしまう。3回目と4回目では、word-per-minute を測定した後で自由読書。5回目は自由読書と、今までに読んだ総語数の集計。6回目は事後テストと事後アンケートを実施。各講座では読書記録 (資料1) として、個人日誌をノートに書かせた。

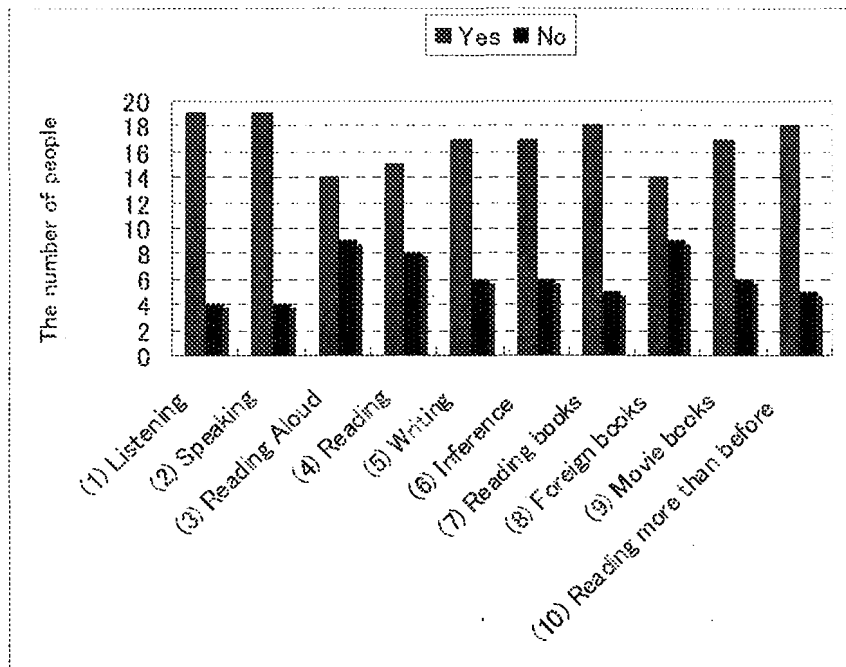
4.2.2. 多読教材について

使用した多読教材は *Oxford Reading Tree (Stage 7)*, *Oxford Bookworms Starter, Stage 1*, *Penguin Readers Easystarts*, *Penguin Readers Level 1* と東京書籍以外の他社の教科書1~3年生用のもの、全部で141冊を用意した。

第5章 結果

5.1.~5.2. 対象者、及びその傾向

3学年266名中の9%にあたる生徒が応募した。事前アンケートの結果はグラフ1の通りで、どの項目においても多読へ高い期待と意欲を持って臨んでいたことがわかる。具体的に見ていくと78%は日本語による読書が好きである。83%が英語を話すことや、聞くことが好きである。英語を読んだり、書いたりすることにおいては、話す、聞くほどは好きでない生徒の数が多。未知語に対して74%が文脈から推測すると答えている。



グラフ 1: 事前アンケート 10 項目への Yes/No による回答結果

5.3. 事前・事後の読解力テストの結果

事前・事後読解力テストを受けた生徒は 26 名であった。その効果を検証するために、多読した生徒 (Extensive Reading Group) と、しなかった生徒 (Non ERG) に分けて比較を試みた。ERG とは総語数が 52 語以上で、講座に出席し続けた生徒を示し、NERG とは総語数がゼロ、途中で辞退した者である。この 2 つのグループの平均点の増減が表 1 である。その増減を百分率で表したのが表 2 である。全体的に事後テストの方が高くなっているが、グループ別で見ると、多読組の平均が 4 点高く、非多読組は約 3 点低下している。

表 1 : 全受験者、および ERG, NERG の事前・事後テストの平均点

	事前テスト平均	事後テスト平均	増減
全対象者 (N=26)	20.54	22.73	+2.19
ERG N=19	20.0	24.05	+4.05
NERG N=7	22.0	19.14	-2.86

表2が示すように、対象者の58%は読解力の得点が増し、38%が減少した。グループ別では、多読組は68%上昇、26%下降した。非多読組は29%上昇し71%下降した。上昇した生徒の87%は多読した生徒であった。この結果から多読した生徒は読解力が向上しただけでなく、その増加の平均点でも高いことがわかった。非多読組に2名増加した生徒がいるが、その増加程度は微々たるものであった。これらの結果から読解力において、肯定的な結果が得られた。

表2: 事前・事後読解テストの増減の数と百分率

	増加			減少			満点	
	人数	%	平均	人数	%	平均	人数	%
全体26人	15	58	6.0	10	38	-4.3	1	4
ERG 19人	13	68	6.23	5	26	-2.8	1	6
NERG7人	2	29	4.5	5	71	-5.8	0	0

5.4. 読解ストラテジーの頻度

この論文では読解ストラテジーとは表3に掲げる項目を表す。対象者は1～6で回答した。6は強い肯定、1は強い否定を示す。読解ストラテジーの全体平均が4.2以上であることから、参加者は、すべての読解ストラテジーを効果的に使っていたことがわかる。

表3: 読解ストラテジー頻度

N=20

項目	質問内容	平均
6	あなたは、わからない単語があっても前後関係から推測する方ですか。	4.6
11	辞書を使わずに、先へ先へと読み進めることができましたか。	4.3
13	英語の読みが速くなりましたか。	4.2
16	状況に応じて、飛ばし読み、ゆっくり読みをすることができましたか。	4.45
17	和訳するよりも、内容を追っていることに気がつくことができましたか。	4.25
18	わからない単語があっても、それを無視して読み進めていくことに不安を感じるものが少なくなりましたか。	4.55
	6項目の平均	4.39

さらに詳しく分析するために、表4では、読解ストラテジーの頻度を、総語数の大小によって比較している。この実験では250語以下をSmall Gross Word Groupとした。また500語以上をLarge Gross Word Groupとした。グループ別で比較すると、11番(辞書に依存しない)において差が大きいことが判明した。次に大きな差があったのが17番(和訳するよりも内容を追う)であった。全体的にLGWGはSGWGに比べて、状況に応じて、多様な読解ストラテジーを柔軟に使い分けていることがわかる。一方、SGWGは辞書に頼りがちで、その結果、内容を追うよりも、和訳す

る傾向があることが読み取れた。総語数が増えていくと、推測できるようになり、未知語の飛ばし読みへの不安が少なくなり、文脈を追いながら、要点を skim するようになっていくことが証明された。

表4：総語数の大小による6つの読解ストラテジーの使用頻度比較 N=20

項目	質問内容	L.G.W. 16人	S.G.W.G. 4人	差
6	あなたは、わからない単語があっても前後関係から推測する方ですか。	4.69	4.25	0.44
11	辞書を使わずに、先へ先へと読み進めることができましたか。	4.88	2.00	2.88
13	英語の読みが速くなりましたか。	4.31	3.75	0.56
16	状況に応じて、飛ばし読みゆっくり読みをすることができましたか。	4.63	3.75	0.88
17	和訳するよりも、内容を追っていることに気付くことができましたか。	4.63	2.75	1.88
18	未知語単語があっても、無視して読み進めることに不安を感じる事が少なくなりましたか。	4.81	3.50	1.31
	6項目の平均	4.64	3.33	1.31

5.5. 4つの変数（読解ストラテジーの平均・WPM・総語数・英語力）の相関関係

この論文では英語力を教文社の実力テストの偏差値とした。表5は4つの変数の相関係数を示す。最も高かったのが英語力とWPM、次に高かったのが総語数と読解ストラテジーの平均であった。もっとも相関関係の低かったのが英語力と読解ストラテジーの平均であった。

表5：4つの変数の相関係数

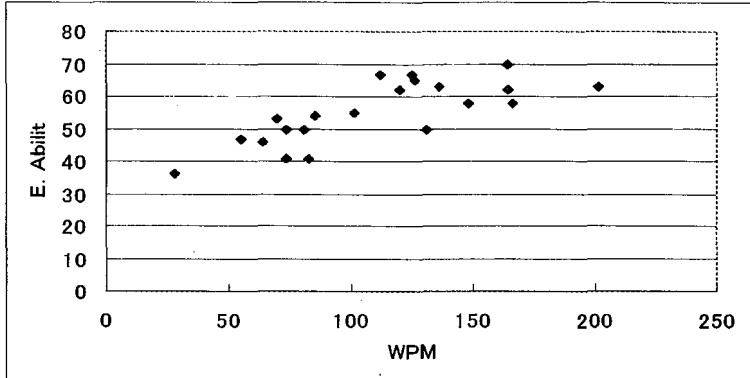
	英語力	読解ストラテジー平均	総語数	WPM
英語力		0.39	0.42	0.77**
読解ストラテジーの平均	0.39*		0.62***	0.49
総語数	0.42	0.62		0.43
WPM	0.77	0.49	0.43	

* $P < 0.05$, ** $P < 0.02$, *** $P < 0.01$

(1) WPM と英語力の相関関係 (グラフ 2)

4つ相関でもっとも高い相関を示し、有意確率が0.02で有意差があった。

橋本(2000)の研究によれば、WPM、読解力はページ数の増加に伴って発達するとしている。彼は多読による効果を証明する際に、WPMを読解力の指標として用い、成績上位、下位者として分類している。私の研究でも、WPMと英語力の強い相関は支持されたとと言える。

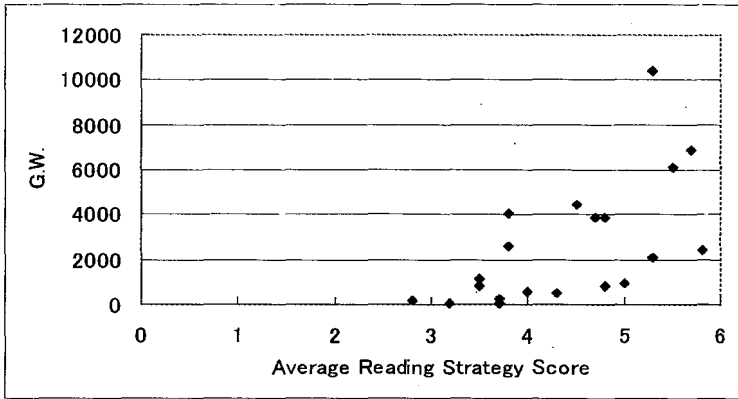


グラフ 2: WPM と英語力の相関関係

(2) 読解ストラテジーの平均と総語数の関係 (グラフ 3)

この2つの変数の相関は2番目に高い相関をしめし、有意確率が0.01で有意差が認められた。総語数が多い生徒は、辞書に依存しないとか、未知語を推測しながら読み進めるなどの読解ストラテジーをより頻繁に使う傾向がやや見られた。

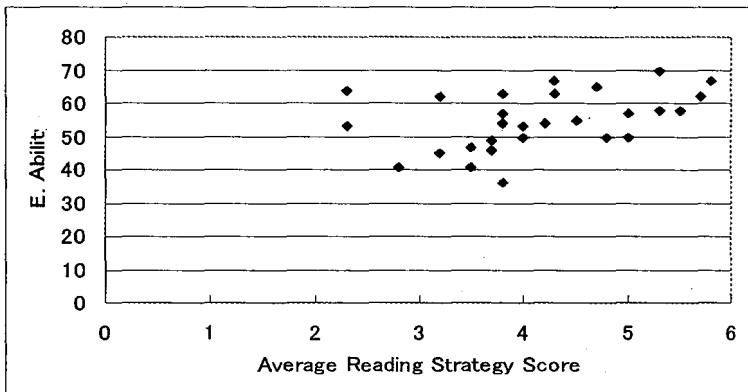
山内はWPMの伸長は学習スタイルに影響されるとしている。熟慮型より衝動型が、細部把握型より概要把握型が、視覚型より聴覚型が、伸びが大きいとしている。私の研究ではWPMの高い生徒がこれらのタイプに該当するかの答えを見出すことはできないが、学習スタイルの変化が総語数増加を引き上げていると思われる。



グラフ 3: 読解ストラテジーの平均と総語数の相関

(3) 読解ストラテジーの平均と英語力の関係 (グラフ 4)

4つの変数の相関でもっとも相関係数が低く、有意確率が0.05で有意差があった。私の実験では読解ストラテジーの平均が4.39であったが、英語力が62以上の生徒3人の読解ストラテジーは平均以下であった。このことは、高い英語力を持っていても、様々な読解ストラテジーを効果的に使うとは限らないということを暗示している。



グラフ 4: 読解ストラテジーの平均と英語力の相関

5.6. 対象者の日誌とコメントより

141冊もの多読教材から、自分が好きなものを選び、できるだけ辞書を使わずに内容を追っていくという読み方は、どの生徒にも新鮮な驚きと喜びを与えた。毎

回の日誌や、事後アンケートを次の5つに分類した。

5.6.1. 外国語学習の意欲

・「英語がズラーと並んでいてビックリしたけど、読んでいるうちに難しいと思わなくなって、わからない単語は飛ばしても後になって段々わかった。このレベルならもっと読みたい。」

・「すごくたくさんの種類の本から自分で選ぶなんて最高だった。知らない単語があっても絵が付いていたし、複雑そうな内容でも、かえって引き付けられた」

・「『Love or Money』はすごく面白かったので、まるで探偵小説みたいにスラスラ読んだ。今度は自分で買って読みたい」

・「幼い頃に大好きだった『The Wizard of Oz』を英語で自分が読めるなんて、もうワクワクします」

・「教科書の読み物は短く、筋が単純で発展もない。それに先生の文法説明が長くて飽きてしまう。多読教材は絵がきれいだし、それをヒントにして読むと内容がわかった」

5.6.2. 自尊心の高揚と自信

Domyei は「自信は自尊心と密接に結びつく」と主張しているが、自己の英語力で読める本を選択できた生徒は通常の英語の授業では得られないような収穫を得た。多読はある意味において「自発的な問題解決学習」であり、どんどん読み進めることで満足と喜びが深くなるようである。多読した生徒は“worthwhile”であり、“effective”であったと感想を書いている。

5.6.3. 書き手と読み手の内的会話

単発的な対話が数語だけで終わる教科書の英会話と違い、物語上の必然的な会話の流れから、心で対話を聞きながら読んでいる生徒がいた。さらにその内容に自分を重ねて参加型の読書をする生徒も見受けられた。英語の onomatopoeia がたくさんあるので、それらも彼らの心の耳を楽しませた。

5.6.4. 対象者の本選択の理由

本を選択した理由は、「題名」や「表紙の絵」と回答している者が多く、ページをめくって「読めそうな英語」だと判断したとか、「本の中の挿絵」で選択したのが数人いた。「有名人のもの」だからと回答したのが2人であった。26%が最初に選んだ本を読みきることができた。

5.6.5. 指導者の日誌

給食台、教卓などに広げた graded readers に驚嘆の声をあげながら突進した女子参加者の壁越しに、3名の貴重な男子が背伸びしつつ、好奇の眼差しを本に向けていた。彼らが選んだ本はビートルズとスポーツ選手の本であった。他社の教科書

には、だれも見向きもしなかった。

WPM 測定と事前・事後テストに使用した Very Easy True Stories は、120 語前後の読み入りニュースがたくさんあり、どんどん読めるので「これなら、何度やってもいいテスト」と笑顔で歓迎された。期末テスト前日は 9 名だけの参加であったが、10 代ロマンスものを赤面とため息まじりに読む者、本を机の上を立てて、ピンと背筋伸ばし、口をばくつかせて無声音読をしている者など、45 分間、英語の本に釘付けの中学生に、33 年間の教員生活の中で初めて出会った。多読教材による自由読書のパワーは、テストのための学習意欲とは質的に異なり、各自の内発的な学習意欲を燃え立たせる引火力があることを目のあたりに見た。最終日には、お目当ての本だったのか、箱に入れたり、出したりしながら名残惜しそうに触れていた生徒がいた。

以上のように graded readers を使った多読指導は、数人の辞退者がいたものの、多読した生徒には自信をつけさせ、自尊心を高揚させる効果があったと主張できる。

第 6 章 分析

6.1. 多読が自発的な学習意欲を喚起した成功例

graded readers 使用の多読指導と授業での読みの指導における生徒の motivation には質的な差がある。それは自己管理による自発学習であり、学習内容の自己選択にある。表 6 は著しい成果をみせたある生徒の読書歴である。

表 6: 多読の成果が顕著であった生徒の読書記録

月日	本の題名	総語数	頁数	レベル	出版社名
2004 2/2	Marcel & the Shakespeare Letters	840	15	300	Penguin 1 Beginner
2/4	The Cup in the Forest	979	15	200	Penguin Easystarts
2/9	Two Boyfriends	1900	29	300	Penguin 1 Beginner
2/16	Escape	1500	24	250	Ox.Bookworms Starters
2/23	Aladdin & the Enchanted Lamp	5200	50	400	Ox.B.Library Stage 1
Total		10419	133		

橋本ほか(2000)の研究では、成績上位の生徒は 150 頁を過ぎると楽しみながら読むようになり、低位の子でも困難を感じることなく読むようになるという。私の調査での最も読んだ生徒は 133 ページであった。彼女の読解ストラテジー平均は 6 点満点中の 5.3 である。この生徒は初回到 Marcel & the Shakespeare Letters を 10

分以内で読み切っている。

Escape を読み終えたとき、「ストーリーがしっかりしていてオチもある。英語の擬音語が面白い。少し難しいかと思って本をめくると、文法や単語が結構わかってうれしい。普通の本のように、余り意識せずに読めるようになった気がする。」と日誌に書いている。Aladdin & the Enchanted Lamp では「少し長めだったけど、ずっと読んでいて最後までなんとか読み終えることができた。日本語で読んだときは違って、細かいところも理解できて楽しかった。これで終わりなのが残念… (泣) I love reading books. これからは読みたい本の中に原書もはいるそうです！」と書き残している。さらに、後輩へのメッセージとして「簡単な本を読めば、自信もつくし楽しい。わからない文だらけの教科書で知識を身に付けて、その知識を使って多読し、精読できれば知識の定着にもなるし、読めている感じが味わえる。勉強用の本でないので、楽しんで読んでください」と締めくくっている。

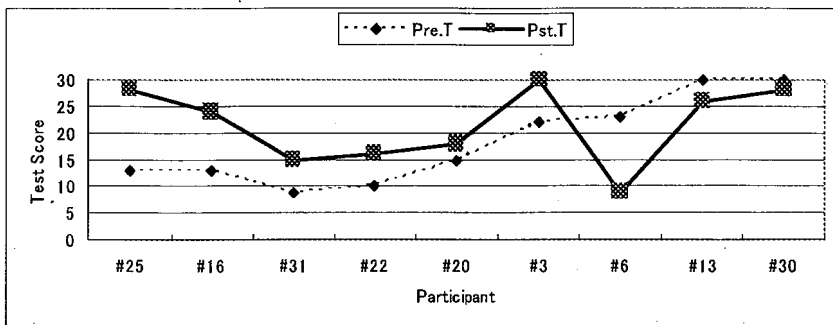
日誌や態度から、母語で年間 180 から 240 冊の読書をする彼女には、Krashen のいう “the power of reading” によって、背景知識、世界知識、スキーマなどが、高い英語力(70)と融合して、150 頁に到達しなくても、読書の楽しみを生み出したものとみえる。recognition knowledge が多読によって、“action knowledge” (Barnes, 1976) に転移したともいえる。「学習の成果は、最終的には純粋なる自発性に結実する」(Little, 1994) という例といえよう。

6.2. 学習者の beliefs

ここでは、learners' beliefs が、多読の成果に及ぼす影響について分析したい。グラフ 6 は多読に前向きに取り組んだ生徒と、多読が受験英語得点アップに役に立たないと思った生徒の事前・事後テストの結果である。また表 7 は、これらの個々の生徒の数字的データである。事後テストで事前テストよりも 60%以上の増加を見せた生徒達 (#25, #16, #31, #22) は英語力、WPM は高くはないが、多読によって読解力が飛躍的に伸びている。#16, #22 は英語力が低くて多読が続くかどうか、教科担任が心配していた生徒であったが、多読に興味を示し一度も休まなかった。特に#22 は年間 50 冊母語で読書する生徒で最後のアンケートで「授業でやっているやり方と違って、多読の方が自分に合っている」とコメントした。彼女の learners' belief が変化したという確実な証拠にはならないが、満足を与えたことは確かである。

一方では#3, #6, #20, #30 は多読に対して強い抵抗を持った。#3 の応募動機は受験勉強のためであった。オリエンテーション後「高校入試の得点アップに結びつかない」と判断し、2 回目の講座では graded readers ではなく、たまたま参考まで

に見せた Children's Birthday Cake の雑誌をバラバラ見て、次に他社の教科書に移ったものの、結局は自分の好みやレベルに合う本にめぐり合えずに辞退した。#3 以外の英語力 57 から 64 の 3 人も graded readers に関心を示さなかった。年間読む本が数冊であり、母語の読書習慣がないことも 4 人に共通している。#13 は事後アンケートで「多読をやるよりも他の勉強をした方が点数は伸びる。辞書を引き、ちゃんと日本語訳をしなければ理解した気がしない」とコメントしている。#20 は通常の授業についていけなくて、1 年生からの英語の復習を期待した生徒で、ノートに書くとか、辞書で意味調べをする学習を望んでいたのが辞退した。



グラフ 6: 事前・事後テストの得点比較

いろいろな角度から多読実験を分析していくにつれて、多読成功の鍵は「成功した生徒」よりも「辞退した生徒」たちの原因の中に潜んでいるのではないかと考えるようになった。通常の授業の読みの指導では文法上のポイントを確認しながら、正確に読み解くこと (decoding) に力点を置く。その結果、英文読解の方法はこれが正統なやり方で、この方法の積み重ねが英語の得点をあげ、高校入試でも役に立つという learners' belief をも植えつけているのではないかという反省である。この伝統的な英文読解信仰者には、多読の「辞書なし、未知語推測、だめなら飛ばし読み」という方法は邪道で信用におけない方法であり、点数アップにならないと即断したのではないだろうか。彼らにとっては、英文読解は「読書」とは別で、テスト用の教材の読解であり、質問に正しく答えて○をもらう作業のことなのであろう。従来の指導法による根強い影響を持つ learners' beliefs を溶かしこみ、精読以外の方法としての多読によって、かつて教室でみんなと学んだことが、己の理解の深い部分で、有効的にリサイクルできるように支援することが重要である。

表 7: 多読を受け入れた者、受け入れなかった者の比較

	多読を受け入れた者				多読を受け入れなかった者				
対象者 ID	#25	#16	#31	#22	#20	#3	#6	#13	#30
英語力	46	41	50	36	41	62	57	64	63
両テスト差	+15	+11	+6	+6	+3	+8	-14	-4	-2
総語数	250	1139	927	4106	180	120	0	0	0
WPM	64	83	74	28	74	120	—	—	—
出席率(%)	67	100	60	100	50	50	17	17	17

6.3. 適切な教材

むしろ失敗例にこそ、改善のヒントが隠されていることは前述したが、個々の英語レベルに合う適切な教材を多種多様に大量に用意することが理想である。3人の男子が途中でやめた理由はスポーツ系の実在人物の教材の少なさであった。10代の男女の淡い恋が下敷きとなっているものは、中学生の男子には好まれない。実在のスポーツヒーローへの憧憬を英語で堪能したいと思われる。Michael Jordan, Pele, Barcelona Games の3冊しかなかっただけに、とても残念であった。出版業者の課題であると思う。

第7章 インプリケーション

7.1. この調査から

今回の調査から次の5点のインプリケーションが浮かびあがった。

第1に多読の成果が現れるには「潜伏期間」が必要であること。金谷他の研究ではその期間を8ヶ月としている。もしそうだとすれば、受験勉強用と勘違いされないためにも中学2年生の文化祭後から初めて、中学3年の1学期頃までが適当と思われる。私の実験はたったの4週間、6回だけの短期間の多読であった。

第2に参加者の数の少なさ。辞退者もあり、最後まで続けた生徒は19名になった。数値的データ分析の量として少なかった。しかし読書レポート、日誌、アンケート等のコメントから、個々の生徒の多読に対する思いが得られ、詳しく分析することができた。

第3に読解ストラテジーに関する回答は、個人の主観的判断に任されていて、真面目な学習者ほど自己評価を厳しくつける傾向があったことである。

第4にWPM79以下の生徒にとって読みやすい本が用意できなかったこと。もし用意してあれば、彼らもスラスラ読める感じを味わえたと思われる。

第5に現場の中学英語教師はほとんど多読に関心がないこと。教科書をしっかり教えこむことで精一杯で、多読などとてもできないと思っている。個人で多読教材を買うには限界がある。多読の効用を啓蒙していくことも課題である。

7.2. 提言

extensive readingの橋渡しとして、2004年7月に、中学1年生に英語の読み聞かせで大成功をおさめた教材がある。*I Like Me*というタイトルからして、生徒は「自己チュー」だと勘違いして逆に耳を澄ませた。日本の校則や仲間と価値観を合わせることに疲れを感じ始めている頃で、癒しと激励の効果があつた。likeの目的語は食べ物とスポーツであることに慣れた彼らにとって、主人公の豚が語る未知語(目的語)が予測できることの興奮から、辞書引きが初めてであるにもかかわらず、自己の予測の確認という熱い動機から必死に調べるのであつた。ドジを重ねてもtry-and-try-again精神を維持しようと頑張るメッセージ、“Be yourself”に圧倒的な共感を示した。感受性に訴える題材の読み聞かせは、教室に読書と音を響かせることも大発見であつた。

次は幼児時代に8割以上の生徒が読んでいるThe Very Hungry Caterpillarの大型紙芝居を使って読み聞かせをした。最後の集団読みでは、幼児期に日本語で読んだ本を、中学生になって英語で音読できる誇りと自信が、張り上げる声から伝わってきた。私などは、単純に曜日と複数形の導入ができると考えていたが、ある生徒は「大人になるということは、食べ物だけでなく、両親や友達のおもいが必要で、それを食べ物にたとえている」と解釈し、またある生徒は「最初はちっけな青虫でも、最後は美しい蝶になるように、だれでも何かを一生懸命努力すれば、最後には夢が叶う」という感想に書き、同じ絵本が年齢を重ねることで、そのメッセージ性の深さを英語で汲み取ることも生徒から学んだ。

外国の優れた本物絵本には、作者が未来世代に託したい人類の魂が詰まっているであろう。美しい絵はそのまま異文化理解にもなる。このような絵本は多読の素敵なwarming-upといえよう。感性に響く、易しい英語の教材が、中学1年1学期から多読への橋渡ししが可能であることにも気づかされた。

文化祭後は、平成16年度の3年生希望者7名にReading Marathonを実施。授業でなく、好きな本を自宅で読むことにした。最高総語数は17300語であつた。400語が1キロなので43.25キロ走破したことになる「自分が選んだ本なので飽き

ることがなく読み続けられた。多読用の本は流れるような感じで自然と目が文を追っている。初めは英語の本を読むことに苦手意識を持っていたが、自分のレベルに合わせて本を読んでいると、時間が経つのも忘れるくらい夢中になっていて楽しかった。Mystery in London は自分が物語りを作っていくゲームブック、White Death はミステリー好きの人にオススメ、Marcel シリーズは簡単に読みやすい。The Wizard of Oz は英語で読めば新鮮な感じで読める。」と自分が読んだ本を解説している。彼女も多読にはまってしまった。

6000 語。これが文部省検定の教科書 3 年間の総語数である。それらはステレオタイプのマネキンが味のないガムをかんでいる光景を思わせる。6000 語なら、今回使った多読教材の 5、6 冊に相当する。最も総語数の高かった生徒は 10 分で The Crown を読み切ったが、これは 4200 語であるから、15 分で、6000 語行くであろう。

東京書籍の New Horizon は全国的に広い範囲で採択されているが、他社の教科書には多読に使える面白い教材がかなりある。これらを差し込み教材として使えば 13000 語はカバーできる。検定済みなので語彙の統制も中学生向きとなっている。多読への踏み台になるであろう。

第 8 章 結論

(1) 多読によって読解力が向上したか。

Graded readers を使用した多読指導は読解力を向上させた。全講座に参加した生徒の 68% の読解力を向上させた。

(2) 多読によってどのような読解ストラテジーを使い、どの読解ストラテジーが多読には有効であったか。

総語数の多かった生徒が最もよく用いた読解ストラテジーは、辞書を使わずに読む進めることであり、それは総語数の少ない生徒の 2 倍であった。

(3) 多読に対する学習者の態度に、どのような変容が見られたか。

自己選択の自由読書は、読む意欲を喚起し、自己の英語力内で読める適切な本を選択できた生徒は、スラスラ読める楽しみを体験でき、自信と満足が得られた。その結果、英語を読むことへの自発的な意欲の保持に有効であった。

(4) 4 つの変数 (WPM, 英語力、総語数、読解ストラテジーの平均) にどのような相関関係が見られたか。

WPM と英語力の相関関係がもっとも強かった。しかし英語力が高い生徒が必ずしも総語数を増加させるわけではなかった。従来の精読による読解指導だけを信じ

る学習者で、母語の読書習慣が身につけてない生徒には、多読への抵抗があった。

最後に今回の多読指導を通して、生徒たちの態度の変容を観察し、多読日誌を読みながら、彼らの成し遂げたことに、賞賛と尊敬の念を覚えた。中学生にも多読ができる道を、New Extensive Readers として、拓いてくれたように思う。多読とは未来に向かって多彩な色の花を咲かせる種を育てる大地のようなものではないだろうか。われわれは、生徒が多読によって、読書の楽しみを得られるように導く facilitator になることが重要なのだと思う。単にテストで点数獲得技術を教える provider であってはならない。多読という世界では、教師も生徒も同じ船を漕いでいる。本の海原を熱愛する船長の役目を演じなければならない。

参考文献

- Benson, Phil. (2001). *Autonomy in Language Learning*. London: Longman.
- Carle, E. (1987). *The Very Hungry Caterpillar*. NY: Penguin
- Carlson, N. (1990). *I Like Me*. NY: Puffin Books
- Day, R. and Bamford, J. (2002). *Extensive Reading in the Second Language Classroom*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Day, R. and Bamford, J. (2004). *Extensive Reading Activities for Teaching Language*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Dornyei, Z. (2001). *Motivational Strategies in the Language Classroom*. Cambridge: Cambridge Language Teaching Library.
- Grave, W. and Stoller, F. (2002). *Reading*. London: Longman.
- Heyer, S. (1998). *Very Easy True Stories*. London: Longman.
- Krashen, S. (1993). *The Power of Reading – Insight from the Research*. London: Libraries Unlimited.
- Krashen, S. (1997). *Foreign Language Education THE EASY WAY*. California: Language Education Associates.
- Krashen, S. (2003). *Explorations in Language Acquisition and Use*. London: Heinemann.
- Lightbown, P and Spada, N. (2002). *How Languages are Learned* London: Oxford University Press.
- Mikulecky, B. (1990). *A Short Course in Teaching Reading Skills*. NY: Addison-Wesley.
- Mikulecky, B. and Jeffries, L. (1997). *Basic Reading Power*. NY: Pearson Education.
- Nuttall, C. (2000). *Teaching Reading Skills in a Foreign Language*. Thailand: Macmillan.

Waring, R. (2000). *The 'Why' and 'How' of Using Graded Readers*. London: Oxford University Press.

金谷憲 (1995) 『英語リーディング論』 河源社 東京

斎藤栄二(1999) 『英語授業レベルアップの基礎』 大修館 東京

斎藤栄二(1996) 『わかるから直読直解の指導』 研究社 東京

酒井邦秀(2003) 『快読100万語・ペーパーバックへの道 筑摩学芸文庫』 東京

佐野正之 (2002) 『アクション・リサーチのすすめ』大修館 東京

高梨庸雄・卯城祐司 (2000) 『英語リーディング事典』 研究社 東京.

高梨庸雄・高橋正夫 (1999) 『英語リーディング指導の基礎』 研究社 東京

津田塾大学言語文化研究所 (2002). 『英文読解のプロセスと指導』大修館 東京

天満美智子 (2001) 『新しい英文読解法』 岩波ジュニア新書 東京

天満美智子(1997) 『英文読解のストラテジー』 大修館 東京

天満美智子(1982) 『子どもが英語につまずくとき』 研究社 東京

橋本雅文ほか(2000) 『多読の効果を検証する』

<http://www.kyokyo-u.ac.jp/kyoukou/kyouka/eigo/sub2/tadoku.htm>

葉袋洋子 (2001) 『リーディングの指導』 研究社 東京

Mason, B(1997) 『多読授業を始める前に』

<http://www.extensivereading.net/er/masonstart.html>

山内豊 (1985) 『中学校における速読指導の試み』 関東甲信越英語教育学会
研究紀要

リーパー・すみ子 (2003) 『えほんで楽しむ英語の世界』 一声社 東京

『多読最前線』(2004) Vol. 52 No.12 「英語教育」 大修館 東京

(岩手大学大学院教育学研究科教科教育専攻英語教育専修)

資料 1

Pleasure Reading Report 多読記録 2月 日 2004年

3年	組	番	名前
本の題名：		著者名：	
出版社名・レベル			
読んだページ		から	まで
登場人物			
わかったこと/気に入った語、文			
わからなかったこと/難しい語、文			
<p>この本の感想</p> <p>1 単語 (very easy / easy / just right / difficult / very difficult)</p> <p>2 内容 (very interesting / interesting / so-so / not interesting / boring .)</p> <p>3 本のお薦め度・星印を1から5までつけて評価</p> <p>4 その理由</p>			
今日の講座内容の感想			